

柳原※ [# 「火+華」、第3水準1-87-62] 子 (白蓮)

## 長谷川時雨

青空文庫



ものの真相はなかなか小さな虫の生活でさえ究められるものではない。人間と人間との交渉など、どうして満足にそのすべてを見尽せよう。到底及びもつかないことだ。

微妙な心の動きは、わが心の姿さえ、動揺のしやすくて、信実は書きにくいのに、今日  
 日の問題の女史をどうして書けよう。ほんの、わたしが知っている彼女の一小部分を――  
 ーそれとて、日常傍らにある人の、片つぼの目が一分間見ていたよりも、知らなすぎるくらいなもので、毎朝彼女の目覚める軒端にとまる小雀のほうが、よっぽど起居を知っているともいえる。ただ、わたしの強味は、おなじ時代に、おなじ空気を呼吸しているということだけだ。

火の国筑紫の女王 白蓮と、誇らかな名をよばれ、いまは、府下中野の町の、細い小路のかたわらに、低い垣根と、粗雑な建具とをもった小屋に暮している燦子さんの室は、日差しは晴やかな家だが、垣の菊は霜にいたんで。古くなつたタオルの手拭が、日当りの縁に幾本か干してあるのが、妙にこの女人にそぐわない感じだ。

面おもやせがして、一層美をそえた大きい眼、すんなりとした鼻、小さい口、顰こてをあてた頭か髪みの毛が、やや細ったのもいたいたしい。金きん紗しやお召の一つ綿入れに、長じゆばんの袖は紫友禅のモスリン。五つ衣ぎぬを剥はぎ、金冠をもぎとつた、爵位も金権も何も無い裸体になつても、離れぬ美と才と、彼女の持つものだけをもつて、肅然としている。黒い一閑張いっかんばりの机の上には、新らしい聖書が置かれてある。仏の道に行き、哲学を求め、いままた聖書に探たずねるものはなにか——やがて妙諦みょうていを得て、一切を公平に、偽りなく自叙伝に書かれたら、こんなものは入らなくなる小記だ。

燦子さんは、故伯爵前光卿さきみつぎようを父とし、柳原二位のお局つぼねを伯母おばとして生れた、現伯爵貴族院議員柳原義光氏の妹で、生母は柳橋の芸妓だということをし、ずっと後のちに知つた女ひとだ。夜会よかいばやり、舞踏まわいばやりの鹿鳴館時代、明治十八年に生れた。晩年こそ謹厳ひといやしくもされなかつた大御所おおごしよ古稀こき庵あん老人でさえ、ダンス熱に夢中になつて、山県やまがの槍踊やりりの名さえ残した時代、上流の俊しゆん髻ぼう前光卿は沐猴もくこうの冠かんしたのは違ちがう大宮人おおみやびとの、温雅優麗な貴公子を父として、昔ならば后きとせきがねともなり得る藤原氏の姫君に、歌人としての才能をもつて生れてきた。

実家だと思つていたほど、可愛がられて育つた、養家親さとの家うちは、品川の漁師だつた。そ

の家でのびのびと育つて年頃のあまり違わない兄や、姉のある実家に取られてから、漁師言葉のあらくれたのも愛敬あいきょうに、愛されて、幸福に、華はなやいだ生涯の来るのを待っていたが、花ならばこれから咲こうとする十六の年に、暗い運命の一步にふみだした。ういういしい花嫁君むつまじの行く道には、祝いの花がまかれないで、呪のろいの手が開ひらけられていたのか、京都下加茂しもがもの北小路家へ迎えられるとほどもなく、男の子一人を産んで帰った。その十六の年の日記こそ、涙の綴つづりの書出しであった。

芸術の神は嫉妬しつと深いものだという。涙に裂くパンの味を知らない幸福なものには窺うかがい知れない殿堂だという。

だが、燦子さんは明治四十四年の春、廿七歳のとき、伯爵母堂とともに別居していた麻布こうがいちよう 筭町すんまちの別邸から、福岡の炭鋳王伊藤伝右衛門氏にとつぐまで、別段文芸に関心はもつていられなかつたようだった。竹柏園ちくはくえんに通われたこともあつたようだったが、ぬきんでた詠があるとはきかなかつた。しかし、その結婚から、燦子さんという美しい女性の存在が世に知られて、物議をも醸かもした。それは、伝右衛門氏が五十二歳であるということや、無学な鋳夫あがりの成金なりきんだなどということから、胡砂こさふく異境に嫁よめいだ「王昭おうしやうく

君」のそのように伝えられ、この結婚には、拾万円の仕度金が出たと、物質問題までが絡んで、階級差別もまだはなはだしかったころなので、人身御供だともまでいわれ、哀れまれたのだった。

人身売買と、親戚補助とは、似ていて違っているが、犠牲心の動きか、強いられたためか、父と子のような年のちがいが醜美はともかくとして、石炭掘りから仕上げで、字は読めても書けない金持ちと、伝統と血統を誇るお公卿さまとの縁組みは、嫁ぐ女が若く美貌であればあるだけ、愛惜と同情とは、物語りをつくり、物質が影にあるとおもうのは余儀ないことで、それについて伯爵家からの弁明はきかなかつた。

だが、そのままでは、燐子さんはありふれた家庭悲劇の女主人公になってしまふ。甘んじて強いられた犠牲となつたのかどうか。それは彼女の後日が生きて語つたではないか。

この手紙は今年の春（大正十一年）中野の隠れ家からうけた一節で、

只今お手紙ありがたく拝見いたしました。実はわたくし、二、三日前からすこし気分がすぐれませんが床についております。急に脈がむやみと多くなつて、頭がいやあな気持ちになる、なんとも名のつけられない病気が時たま起りますので。でも今日は

大分だいぶんよろしゆう御座いますから、早速御返事申上げて置こうと、床の中での乱筆よろしく御判読願ひ上げます。(中略)仰せの通り世間のとかくの噂うわさの中にはずい分、いやなと思う事もなくても御座いませぬけど、これも致いたしかた方かたがないなり行きだと、今までもあまり気にかけたことも御座いませぬ。

私信の一部を公にしては悪いが、わたしの筆に幾万言を費ついやして現わそうとするよりも、この書簡の断片の方がどれだけ雄弁に語っているか知れない。はじめからそういうふうに冷淡うわさに、噂うわさとして聞流す女性はすくない。

いづぞや九条武くじょうたけこ子こさんと座談のおり、旅行のことからの話ついでに、

「別府べつぷには燐あきさまの御別荘おきがおりますから、それによるしう御座いますの。随分前から御一緒に行くお約束になつていて、やつと参りましたのよ。伊藤さんがお迎えなからいらつしやるはずでしたところ、風邪かぜをおひきになつたつて電報が来たものですから、燐あきさまは急いでお帰りになりましたの。だから残念でしたわ。」

語る人のあでやかな笑顔えがお。それよりも前に、わたしはかなり重く信用してよい人から、こういうふうにも聞いていた。

白蓮さんは伝右衛門氏のことを、此この方かたが、此方このがといわれるので、何となく御主人

へ対して気の毒な気がして返事がしにくかった。それに、あの人の歌は、どこまでが芸術で、どこまでが生活なのか——あの生活が嫌なのだとはどうしても思われぬ。

手紙のことといい、武子さんの話の断片といい、この歌の評といい、突然なので、知らない読者には解しかねるであろうが、この間には、例の白蓮女史失踪事件があり、彼女の生活の豪華であったことが、知らぬものもないというほどであり、和歌集『踏絵』を出してから、その物語りめく美姫の情炎に、世人は魅せられていたからだ。

この結婚は、無理だというのが公評になっていた。作品を通して眺めた夫人は、キリスト教徒のためされた、踏絵や、火刑よりも苦しい炮烙の刑にいる。けれど試す人は、それほど惨虐な心を抱いているのではない。それどころか、宝として確かりと握っていたのだとも思われる。冷たさにも、熱さにも、他の苦痛など、てんで考えている暇のない専有慾の満足と、自由を願うものとの葛藤だったのだ。もとより、いつも掴むものは強い力をもち、かよいものが折り伏せられるのは恒だが——



——これは前のつづきではない。前章は、大正十一年の二月に書いたのだが、その続きがどうしても見当らない、図書館にも幾度かいつて探してもらったが、続きの載ったはずの雑誌はあつても出ていない。そこで、よく考えてみたらば、こんなことがあつたのを忘れて、続きが出たとばかり思っていたのだった。

こんなこととは、燐子さんの兄さんの柳原伯が、わたくしの母をわざわざ横浜の手前の生麦<sup>なまむぎ</sup>まで訪ね<sup>たず</sup>られて、続稿を、やめさせてくれまいかと頼まれたのだった。箱入り一閑張りの、細長い柱かけの、瓢箪<sup>ひょうたん</sup>筆の花入れのお土産<sup>みやげ</sup>を取出して見せながら、母は言い憎そうにいうのだった。わたしは、そのふらふら瓢箪筆をみながら、止<sup>や</sup>めるとも止めないともいわないで、母のいうことだけきいていた。

「お困りだそうだから——」

わたしはただ笑った。ありとある新聞が、徹底的に書きつくしたのに、今になってと。だが、その、今になってが困るのかなと思つた。だが、母の弱さにも嘆息<sup>ためいき</sup>した。母は合資<sup>うし</sup>の、倒れかけた紅葉館<sup>こうようかん</sup>を建て直して、儲け<sup>もく</sup>を新株にして、株式組織に固め、株主をよろこばせたうえで、追出<sup>おいだ</sup>された。年老いて、我家<sup>わがや</sup>も投<sup>ほう</sup>り出しておいて、故中沢彦吉さんに見出<sup>みいだ</sup>されたからと、意気に感じて、夜の目も眠<sup>ね</sup>ないで尽した誠実はみとめられずに、喧嘩<sup>けんか</sup>

のように出されて、子たちがいる家にも足むけが出来ないと、死にもしかねない有様に、当時、草茫ぼうぼう々とした、破あばら家やを生麦に見つけだして、そこに連れて来てあげて、やっと心持ちを柔らげさせたのではなかったか。そのおり、利益のあったときには、長谷川さん長谷川さんとやさしくした株主のだけれが、優しい言葉をかけたか？ もとより、無智だった母の、法律的なことは知らずに、感情からのゆきちがいがあったとしても、権利、義務を主とした会社ではなく、酒と媚こびの附属する料理店で、お客であって株主でもある人たちは、一番やすく遊んで食べて、利益も得ている、その株主の一人で柳原さんもあったのだ。顔かおなじみ馴染みを利用するのが、あんまり現金すぎるとも思い、引受けた母までが嫌いやだった。だからといって、それとこれを混まじて、ものを書くような卑劣ひりやうさを持つかとおもわれるより、そう思うほうが、よっぽど賤いやしいと思ったのだ。だが、原稿の続きは出なかったのだ。ガン張がつても誌面は自分のものでないから、どうにもしようがなかったのだ。だから、つづきはわるいが、ここからは新しく書くことにする。

白蓮さんを見たのは、歌集『踏絵』が出て、神かんだにしきちやう田錦町の三河屋という西洋料理やで披露があったとき、佐佐木信綱先生から、御招待があったのでいったときだった。柳原伯

夫人のお姉さんの、かばやま樺山常子夫人がかいぞえ介添で、しつとりとしていられたが、白蓮さんは『踏絵』で感じた人柄よりも、ちよくで、うるおいがないと思っただのは、あまりに、

『踏絵』の序文が、

「白蓮」は藤原氏の娘なり「王政ふたたびかへりて十八」の秋、ひむがしの都に生れ、今は遠く筑紫つくしの果はてにあり。——半生ようや漸くすぎてかへり見る一生の「白き道」に咲き出でし心の花、花としいはばなほあだにぞすぎむ。——さはれ、その夢と悩みと憂愁と沈思とのこもりてなりしこの三百余首を貫ける、深刻にかつ沈痛なる歌風の個性にいたりては、まさしく作者の独創といふべく、この点において、作者はまったく明治大正の女歌人にして、またあくまでも白蓮その人なり。ここにおいてか、紫のゆかりふかき身をもて西の国にあなる藤原氏の一女を、わが『踏絵』の作者白蓮として見ることは、われらの喜びとするところなり。

ネー  
こういう書きかたであつて、しかも『踏絵』が次に示すような、哀愁をおびた、情熱パッション的ななかに、悲しい諦あきらめさえみせているので、感じやすいわたしは自分から、すつかりつくりあげた人品ひとがらを「嫦娥じようが」というふうにきめてしまっていたのだった。『踏絵』

の装<sup>そうてい</sup>幘<sup>い</sup>が、古い沼の水のような青い色に、見返しが銀で、白蓮にたとえたとかきいたが、それからくる感じも手伝って、嫦娥と思ひこませ、この世の人にはない気高さを、まだ見ぬ作者から受取ろうとしていた。

だが、わたしは、そのおりの印象を、ふらんすの貴婦人のように、細<sup>ほそ</sup>やかに美しい、凜<sup>りん</sup>としていたりといっている。そして、泉鏡花さんに、『踏絵』の和歌<sup>うた</sup>から想像した、火のよ<sup>う</sup>な情を、涙のように美しく冷たい体<sup>からだ</sup>で包んでしまった、この玲瓏<sup>れいろう</sup>たる貴女<sup>きじよ</sup>を、貴下<sup>あなた</sup>の筆で活<sup>いか</sup>してくださいと古い美人伝では、いつている。貴下のお書きになる種々な人物のなかで、わたくしが一番好きな、気高い、いつも白と紫の衣<sup>きぬ</sup>を重ねて着ているような、なんとなく靈氣<sup>れいき</sup>といったものが、その女をとりまいてる。譬<sup>たと</sup>えていえば、玲瓏たる富士の峰が紫に透<sup>す</sup>いて見えるような型の、貴女をといっている。これはだいぶ歌集『踏絵』に魅せられていた。

たしかに、わたしは『踏絵』のうたと序文によつばらいすぎてはいたが、昔ならば、女<sup>に</sup>御<sup>よし</sup>、后<sup>きさき</sup>がねとよばれるきわの女性が、つくし人<sup>びと</sup>にさらわれて、遠いあなたの空から、都<sup>みやこ</sup>のしのび、いまは哲学めいた読<sup>よみ</sup>ものを好むとあれば、わたしの儂<sup>はかな</sup>んだロマンスは上々のもので、かえって実在の人を見て、いますこしうちしめりておわし候え、と願ったのもよんど

ころない。それほどに『踏絵』一卷は人の心をとらえた。

われは此<sup>ここ</sup>処<sup>こ</sup>に神はいづくにましますや星のまたたき寂しき夜なり

われといふ小さきものを天<sup>あめ</sup>地<sup>つち</sup>の中に生みける不可思議おもふ

踏絵もてためさるる日の来<sup>き</sup>しごとくも歌反<sup>ほく</sup>故<sup>こ</sup>いだき立てる火の前

吾<sup>われ</sup>は知る強<sup>も</sup>き百千<sup>もち</sup>の恋ゆゑに百千の敵は嬉しきものと

天<sup>あめ</sup>地<sup>つち</sup>の一大事なりわが胸の秘密の扉<sup>とびら</sup>誰か開きぬ

わが魂<sup>たま</sup>は吾<sup>われ</sup>に背<sup>そむ</sup>きて面見<sup>おも</sup>せず昨日<sup>きのう</sup>も今日も寂しき日かな

骨<sup>こつ</sup>肉<sup>にく</sup>は父と母とにまかせ来ぬわが魂<sup>たま</sup>よ誰<sup>た</sup>れにかへさむ

追憶<sup>とほり</sup>の帳<sup>とほり</sup>のかげにまぼろしの人ふと入れて今日もながむる

船<sup>た</sup>ゆけば一筋白き道のあり吾<sup>われ</sup>には続<sup>つ</sup>く悲しびのあと

誰<sup>た</sup>れか似る鳴けようたへとあやさるる緋房<sup>ひぶさ</sup>の籠<sup>かご</sup>の美しき鳥

歌集のようになるが、もう二、三首ひきたい。

殊<sup>ことさら</sup>更に黒き花などかざしけるわが十六の涙の日記

わが足は大地だいちにつきてはなれ得ぬその身もてなほあくがる空

毒の香たきて静かに眠らばや小がめの花のくづるる夕べ

おとなしく身をまかせつる幾いくとし年は親を恨みし反逆者ぞ

殉教者の如くに清く美しく君に死なばや白百合の床とこ

昔より吾われあらざりし其世より命ありきや鈴蘭の花

息絶ゆるその刹那せつなこそ知るべくや死しにおもむきの趣恋のおもむき

三十三歳の豊麗な、筑紫つくしの女王白蓮は、『踏絵』一卷でもろもろの人を魅了しつくして

しまつて、銅御殿あかがねごてんの女王火の国の白蓮と、その才華美貌を讃たたえる声は、高まるばかり

であつた。伝右衛門氏は、それほどの女性ひとを、金で掴つかんでいるというふうに、好意をよせ

られないのもしかたがなかつた。

だが、その時でも、どこまであの生活がいやなのか、あの歌のどこまでが真実なのかと  
いったのは、彼女をよく知っていた人だと私は前にもいったが――

大正十年十月廿二日の、『東京朝日新聞』朝刊の社会面をひらくと、白蓮女史失<sup>しつ</sup>踪<sup>そう</sup>のニュースが、全面を埋<sup>う</sup>めつくし、「同<sup>どう</sup>棲<sup>せい</sup>十年の良人<sup>おとと</sup>を捨<sup>す</sup>てて、白蓮女史情人<sup>もと</sup>の許<sup>もと</sup>へ走る。夫は五十二歳、女は二十七歳で結婚」と標柱して、左角の上には、伊藤燐子<sup>あきこ</sup>の最近の写真の下に宮崎 竜<sup>りゅう</sup> 介<sup>けい</sup>氏が一つ枠<sup>わく</sup>にあり、右下には、伊藤伝右衛門氏と燐子さんの結婚記念写真が出ていた。

その記事によると、十月二十日午前九時三十分の特急列車で、福岡へかえる伝右衛門氏を東京駅へ見送りにいったまま、白蓮女史は旅館、日本橋の島屋<sup>しまや</sup>へかえらず、いなくなってしまったということや、恋人は帝大新入会員の宮崎竜介氏であることや、結婚の間違っていたことや、柳原家の驚きや、まだ福岡の伊藤氏は知らないということが、紙面一ぱいで、誰にも、ああと叫ばせた。

次の日、廿三日の朝刊社会面には、伝右衛門氏へあてた、燐子さんからの最後の手紙――絶縁状が出た。全文を引かせてもらうと、

私は今貴方<sup>あなた</sup>の妻として最後の手紙を差上げます。

今私がこの手紙を差上げるといふことは貴方にとって、突然であるかもしれませんが

私としては当然の結果に外ならないので御座います。貴方と私との結婚当初から今日までを回顧して私は今最善の理性と勇氣との命ずる処に従つてこの道を取るに至つたので御座います。御承知の通り結婚当初から貴方と私との間には全く愛と理解とを欠いていました、この因襲的結婚に私が屈従したのは私の周囲の結婚に対する無理解とそして私の弱少の結果で御座いました。しかし私は愚にもこの結婚を有意義ならしめ出来得る限り愛と力とをこの中に見出して行きたいと期待し、かつ努力しようと決心しました。私が儂ない期待を抱いて東京から九州へ参りましてから今はもう十年になります。私とその間の私の生活はただ遣瀬ない涙を以ておおわれました。私の期待は凡て裏切られ私の努力は凡て水泡に帰しました。貴方の家庭は私の全く予期しない複雑なものでありました。私はここにくどくどしくは申しませんが、貴方に仕えている多くの女性の中には貴方との間に単なる主従関係のみが存在するとは思われないものもあります、貴方の家庭で主婦の実権を全く他の女性に奪われていたこともありました。それも貴方の御意志であつた事は勿論です。私はこの意外な家庭の空氣に驚いたものです。こういう状態において貴方と私との間に眞の愛や理解が育まれようはずがありません。私はこれらの事についてしばしば漏らした不平や反抗に対して貴方がある



いは離別するとか里方に預けるとか申されて実に冷酷な態度を取られた事をお忘れにはなりません。またかなり複雑な家庭が生む様々な出来事に対しても、常に貴方の愛はなく従つて妻としての価を認められない私はどんなに頼り少く淋しい日を送つたかはよもや御承知なきはずはないと存じます。

私は折々我身の不幸を果敢なで死を考えた事もありました。しかし私は出来得る限り苦悩を、憂愁を抑えて今日まで参りました。この不遇なる運命を慰めるものは、唯歌と詩とのみでありました。愛なき結婚が生んだこの不遇と、この不遇から受けた痛手から私の生涯は所詮暗い帳の中に終るものだと諦めた事もありました。しかし幸にして私には一人の愛する人が与えられて私はその愛によつて今復活しようとしてるのであります。このままにして置いては貴方に対して罪ならぬ罪を犯すことになることを怖れます。もはや今日は私の良心の命ずるままに不自然なる既往の生活を根本的に改造すべき時機に臨みました。虚偽を去り真実につくの時がまいりました。依つてこの手紙により私は金力を以つて女性の人格的尊厳を無視する貴方に永久の訣別を告げます。私は私の個性の自由と尊貴を護りかつ培うために貴方の許を離れま

す。永い間私を御養育下された御配慮に対しては厚く御礼を申し上げます。

二伸、私の宝石類を書留郵便で返送致します。衣類などは照山支配人への手紙に同封しました目録通り、凡てそれぞれに分け与えて下さいまし。私の実印は御送り致しますませんが、もし私の名義となつていゝるものがありましたらその名義変更のためには何時でも捺印致します。

十月廿一日

燦子

伊藤伝右衛門様

この手紙が出るまでもなく、前日の家出だけでも、事件はお釜の湯が煮えこぼれるような、大騒ぎになつていた。各新聞社は、隠れ家の搜索に血眼だったが、絶縁状が『朝日新聞』だけへ出ると物議はやかましくなつた。しかも、その手紙が、肝心な夫伝右衛門氏の手にはまだ渡つていないのに、新聞の方がさきへ発表したというので騒いだ。黒幕があるというのだ。

おなじ廿三日の、おなじ欄に、伝右衛門氏の九州福岡での談話が載つた——  
「天才的の妻を理解していた」という見出しで、

互の世界はちがつていても、謙遜しあうのが夫婦の道、だが絶縁状を見たうえは、何とか処置する。

勿論、今朝の（廿二日）新聞で事情の大略は知ったが、しかし、そんな事が実際あるべきものとは思われない。燐子としても、そんな無分別なことを果してしたものだろうか、本月末には博多に帰って来る約束をしてある。家庭のことを振りかえって見ても、不愉快や、不満に思うふしは毛頭あるはずがないと思います。随分我儘な女です。何不自由なく、世間から天才とか何とかいわれるまで勉強もさせ、小遣だつて月五十円はおろか一万円にもおぼることすらある。あの女を、伊藤なればこそ養っているなどと噂もある。

それは柳原さんや、入江さんも知っている。

私は田舎者の無教育ですから、燐子が住んでいる文学の世界などは毛頭知りません。だからその点遠慮して、どんな事をしようが、何一ツ小言をいった事はありません。

「忘れがたき別府の一夜」の題下には、大正八年一月末に（『踏絵』が出てから数えて三年目）湯の町の別府に、宮崎氏が白蓮さんをたずねた。その後『解放』の同人たちに噂が

高く、春秋の上京に、散歩、観劇などを共にしていたとある。

雑誌『解放』は、吉野博士を中心にして、帝大法科新人会の人たちが編輯へんしゅうをしていた、高級な思想文芸雑誌だった。白蓮女史の劇作「指鬘外道しまんげどう」を掲載することについて、誰かがうちあわせにゆくことになり、宮崎氏がいったのだった。そのあとでは、宮崎氏の机上はうずたかくなるほど、電報で恋の歌がくるというので、みんなが羨うらやんだということだった。

この事件についての、世間の反響の一部分を、おなじ新聞からとってみると、廿三日のに、九大の久保猪之吉博士くほいのきち夫人より江さんが——この夫妻も、帝大在学「雷会」時代からの歌人で、

上京前に訪問したら、涙ぐんで、めいりこんでいて「伊藤が愛がないのでさびしくてしかたがない。高い崖がけの上からでも飛降りとびおりて死んでしまいたい」といつていたが、感情が昂こじてこんな事になったのか、ある意味で白蓮さんはうたを実行されたのだ。と語っている。

また、九条武子さんは、まあと大きな吐息をついて、

只今が初耳でございませう、随分思いきった事をなさいましたねえ。あの方とは、昨年

お目にかかりました後は、お互にちよいちよいゆき来はしておりますが、唯うたのお友達というだけ、それほど深い話ありません。先日も九州でおめにかかりましたが、それほど深いお悩みのあることは、素振そぶりにもお見せになりませんでした。御主人は太っ腹な、それは気持ちのいい方です。まさか短気なことは遊ばしはしませんでしょうね。お年もとり、御思慮も深い方ですが、どうなる事でしょう。

と、さすがに友達の身を案じて、じつとしてはいられぬという面おももちだったとある。

博多はかたなかけん中券の芸妓ふな子は二十歳で、白蓮さんに受出されて、おていさんという本名になつて、伊藤家にいる。その女ひとのいうのには、

燦子さんは、お父さまにつかえているつもりだといって、平生へいせいからさびしそうにしていたが、(私が)妾めかけになつたのもうけだされたのも、奥さまからなので、嫌いやだけれど納得したのに――

といっている。

廿三日附朝刊には、論説も「燦子事件について」とあつて、その概略をつまんでみると、燦子の事件はあくまで慨嘆すべきものか、あるいはかえつて謳歌おうかすべきものか、吾人ごじんはこれを報道した責任として、ここにいささか批評を試みたい。(略)

彼女の精神生活は甚だ同情すべきものだが、技巧と粉飾が臭気の高い歌で訴えるように事実苦しみぬいていたかどうか。（略）この行動が、はたして自動的か他動的か、これもまた批判してその価値をさだめる有力な材料でなくてはならない――

――燦子事件の真相と燦子の思想とによってわかるものと思う。更に細論の機会をまたんとす。

といっている。

廿五日ごろになると、帝大法科の教授連が批判回避の申合せをし、白蓮問題は、暫く何もうまいということになったが、牧野、穂積ほつみ両博士が興味をもっているとあり、投書の「鉄箒」欄が段々やかましくなっている。

白村はくそんの近代の恋愛観のエッセイを読み続けてゆくと、家名、利害をはさまず、人格と人格の結合、魂と魂との接触というが、白蓮、伊藤、宮崎おのおのたど各々迎るべきをたどつた。（鉄箒）

「法廷に立て」伝右衛門が白蓮女史に送った手紙誰が書いたのか、甚だもって伝右衛門らしくない。彼がとる態度は、有夫かん姦の告訴、白蓮は愛人をともなつて法廷に立て。

（鉄箒）

「栄華の反映」自分を崇拜している年下の男の方が、自分の弱点を知る石炭みたいな男より我儘が出来るのが当然だが愛がなくてももの同棲十年は、相当情誼じょうぎを与えたはずだ。（鉄箒）

天才は不遇な裡うちに味もあれば同情もあるのだ——虚名を求めて彼女の轍てつを踏むときバクレンとなるなかれ。（鉄箒）

「鉄箒」欄がいつている伝右衛門の手紙というのを引きたいが、夕刊紙かまたは他紙のであったのか、見当らなかつた。震災が中であつたので、とっておいた参考紙も失なつてしまつたのでいまではわからない。

で、柳原家の方では、合理的処置——円満離婚の上で自邸に引取る方針だ。その上で当事者の考えで解決するといひ、宮崎氏は、燐子はきつと保護する。ただ父に（滔とう天氏てん）叱しかられはしまいかと、いかにも若々しい学徒の純情でいつている。

厨川くりやがわはくそん白村氏の「近代の恋愛観」が廿回ばかりつづいて、やはり『東朝』に出ていた時分だったので、白村氏は「鉄箒氏」に答えて、

——今日の見合いの方法に、改良を加え青年男女に正当な接触を与えるのが、今日の社会のために望ましい事である。私は本紙に、近代の恋愛観というのを草そうし、連載中燐子事件突発。近代生活の重要な問題として、概括的に一般に恋愛と結婚について述べたかの一文の中に、今回の事件について、凡すべて私の見解にはあまり明めい瞭りょうすぎて、露骨なほど明かに書いておいたから、いま質問を受けるのを遺憾と思う。

——今度の行動には多くの欠点手落ちがあった。絶縁状が相手に落ちないうちに発表され、自分が独立しないで多くの人に依頼したこと、自ら妾しやうを夫に与えていた事、非難の点多し。これは外面的な、従属的なことである。

——今度のようなことは、男でも女でもちよつと思いきって決行出来ないのが普通だ。それを断行した事によつて、このインフェルノから救われたのは、独り『踏絵』の女詩人ばかりではなく、伝右衛門氏にとつてもまた幸福であつたことを考えねばならぬ。

（概略）

白蓮さんの方で、着物も指輪も手紙をつけて送るかえしたといえ、伝右衛門氏の側では、絶縁状は未開封のまま突きもどすといひ、正式に離婚をするといつている。各々の立



場が違つて、宮崎氏の方は、燐子さんの環境から見ても、どこまでもああした、自覺的態度を強調させようとし、事件が大袈裟おおげさになることは、もとより覺悟の上であつたらうが、絶縁状の字句が、何やらん書生流で、ほんとに、心しんから底から、がまんがまんのなりかねた女がつきつける手紙としては——情熱の歌人の書いたものとしては、おなじキツパリしすぎるなかに欠けたもののある感じと、踊らせよう、騒さわぎたたせようとするいがあるふうにも感じられる子供っぽい理窟りくつ、世馴よなれない腕わんぱく、白さがあるのとは反對に、伝右衛門氏の方で、正式に離縁りえんというのは、どことなく、どつしりして、わるあがきがちよつと去いなされたかたちにもとれる。

廿三日には隠れ家も知れて、黒ちりめんの羽織を着て、面おもやつれのした写真まで出ていた。軽い風邪かぜで寝ねていて、親戚しんせきの人にも面会を避けると、自殺の噂が立つたり、警察でも調べたとあつた。

そのころ、丁度ワシントン会議のあつたところで、徳川公爵や、加藤友三郎大将の両全權が、鹿島丸かしまるでアラスカの沖を通つている時に、日本からの無電は白蓮事件をつたえ、乗組の客はみんな緊張して、すさまじい論戦が戦たたかわされた。それは廿四日のことだとも伝えできた。

と、いうだけでも、どんなにこの事件が、何処どこもかも沸騰させたかということがわかるではないか。まして生家の御同族がたをや！ 真に、白蓮燐子は身の置きどころもない観だった。

だが、ああいった武子さんは、自分で綿入れを縫って隠れ家へ届けている。

わたしが訪ねたのは、もう写真班の攻撃もなくなった、燐子さんの廻りも、やっと落附いてきた時分だった。山本安夫と表札は男名でも、燐子さんと台所に女の人がいただけだった。ふと、瘦やせた女ひとの、帯のまわりのふくよかなのが目についた。そのことを、どこの何にも書いてなかったのは、気がつかなかったのかも知れないが、煩うるささが倍加しなくてよかつたと、わたしは心で悦んでいた。晒さらし館あんで、台所の婦人ひとがこしらえてくれたお汁粉しるこの、赤いお椀わんの蓋ふたをとりながら、燐子さんが薄いお汁粉を搔かき廻まわしている箸はしの手を見ると、新聞の鉄箒欄の人は、自分を崇拜している年下の男の方が、我儘がらみが出来るのは当然だがといったが、どんなところから割出したものかと思つた。昨日きのうまでは、精神的の苦痛はあつても、いわゆる我儘な生活が出来たのだ。こんどは、精神的幸福はあつても、我儘な生活が出来るわけがないではないかといいたかつた。ほんとの、生きた生活に直面するのに――

—生きた生活とは、そんな生なま優やさしいものではない。

長男香織かおりさんは生れた。生れる子供の籍だけは、こちらへほしいとは伝右衛門氏の願いだつた。柳原家で拒んだのだという。生れた子のことで、燐子さんは姿をかくさなければならなかつた。わたしは子供を離さずに転々していた燐子さんを、あんなに好いたことはなかつた。昨日は下しも総そうに、明日は京あす都の尼寺にと、行衛ゆくえのさだまらないのを、はらはらして遠く見ていた。あとでの話では、かえつてその時分は経済的に楽だつたのだというこ  
とで、何処かしらから物質は乏しくなく届いていた。愁つらかつたのは宮崎家の人となつてか  
ら、馴なれぬ上に、幼児は二人になり、竜介氏は咯かく血けつがつづいて——ただ一人のたよりの  
人は咯血がつづく容体で——その時の心持ちはと、あるとき、語りながら燐子さんは面おもてを  
ふせた。

燐子さんは働きだした。達たつ者しゃに書いた。長編小説でもなんでも書いた。選挙運動には  
銀座の街頭にたつて、短たん冊ざくを書いて売つた。家庭には荒くれた男の人たちも多くいるし、  
廃はい娼しょうしたい妓ひとたちも飛ひ込んできた。そのなかで一ぱいに立ち働はたらきもする。かつての  
溜ため息いきは、榮えい耀ようの餅もちの皮だと悟りもした。

いつわらぬ心境を歌にきこうと、最近、以前のと近ごろとの歌を自選してくださいとおたのみしたらば、こんなのが来た。

筑紫のころ

われはここに神はいづこにましますや星のまたたきさびしき夜なり

和田津海の沖に火もゆる火の国にわれあり誰そや思はれ人は

われなくばわが世もあらじ人もあらじまして身をやく思ひもあらじ

その後

思ひきや月も流転のかげぞかしわがこし方に何をなげかむ

かへりおそきわれを待ちかね寝し子の枕辺におく小さき包

子らはまだ起きて待つやと生垣の間よりのぞく我家のあかり

子をもてば恋もなみだも忘れたれあ窓にさす小さなる月

ああけふも嬉しやかに生身のわがふみてたつ大地はめぐる

なんとという落附いた境地だろう。この安心立命の地を、武子さんはどう眺めたらう。お  
おそういえば、燦子さんは面白い話をしたことがある。武子さんが九州へゆかれたとき、

伊藤伝右衛門氏は、筑紫の女王のところへ、本願寺の生菩薩さまが来られるときいて有頂天になり、座ぶとんは揃えて、緞子、夜具類はちりめん、襖をはりかえさせ、調度は何もかも新しく、善つくし、美を尽さねばならぬときめた。それはおなじ九州のある豪家へ武子さんが招ばれた時には、何千円かを差上げて来ていただいたというのに、我家へは無償でこられるということより何より、それほどの人にわが成金ぶりと、何処にも負けない豪奢ぶりを見せなければおさまらないのだった。それをふと、

本願寺さまだつてお手許が——武子さんはそんなにおごつてはいません、といつてしまつたらば、急に見下げて、何もかも新しい調度は取消しにして、何もさせないので困つてしまつたということだ。

それが、何もかも語つているとおもう。出来ない辛抱は、今の道にくるまでの、新しい生活にもあつたかもしれない。けれど、澄みたる月は暴風雨のあとにこそ来る。あらしはすぎた。燦子さんのこしかたも大きな暴風雨だった。

——昭和十年九月十七日——

燦子さんの生母さんのことも、このごろわかつたが、もうお墓の下へはいつていて、

燦子さんは墓参りをしただけで、なんにも言えなかつたのだ。若くて死んだお母さんは、柳橋でお良りようさんと名乗り、左ひだりづま棲まをとつた人だつた。姉さんは吉原芸妓の名妓だつたが、その老女は、燦子さんを姪めいだということをし、どんな親しい人にも言つたことがないほどかたい人だつた。この姉妹は幕末の外国奉行新見豊前守にいみぶぜんのかみの遺児だといふ。ここにも悲しき女ひとはいたのだ。

# 青空文庫情報

底本：「新編 近代美人伝（下）」岩波文庫、岩波書店

1985（昭和60）年12月16日第1刷発行

1993（平成5）年8月18日第4刷発行

底本の親本：「近代美人伝」サイレン社

1936（昭和11）年2月

入力：門田裕志

校正：noriko saito

2007年8月13日作成

2014年7月27日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

柳原※ [ # 「火+華」、第3水準1-87-62 ] 子 (白蓮)  
長谷川時雨

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>